

特別  
千 12  
3643  
196





風俗文選序

月澤律師 李由述



龜城乃羽友子西老井の評六滑枕石訓陪  
新書の文章を拾ひ集めて風俗文選と題  
すむうやむらた文致集めて之を

幸於文釋といへば我おふけ文釋を本朝の人  
述れりて文の体まゝ

漢文なる一今評六文選の如き乃文



梅若重氏  
昭和四年十月七日  
寄贈



章ありて其体まのり漢文ふかれしむ  
うしりやまと河ありしといふ意は  
そ能張相格のまゝのりて

本朝は文章と稱はしむ相も今世風俗文藝の  
事なるべし又漢文も文字は教を定む教を  
かゝる格まきまゆふべしとされし河は  
又まをとりて文藝と古文と不能事ふ其体  
相違あまハ漢文とて能張相と目しり

あて和文もふ文字の教は下は類字  
とてまありしをまきまゆふべしとされし河は  
通のりて或は類字は是れ又の類字を  
一格ありあふりし類字を用ふるも其  
事はあつて自由なるべし又後律を  
かゝるのりて類の類ありて其辭を定む  
るも其意を得しむべし江東の律師  
本由字買公年於四極廣の序



風俗文選序

落柿舎 去來

世の俳諧乃又ありて之集といふを此の如く安ん  
先師一とて思ひ置る事倍々と何ういふ  
相希<sup>稀</sup>なれどもむろいむろいむろいむろいむろいむろい  
と世なるもん今や門家此れ多終りて風俗は終る  
とてまふふ集々<sup>集</sup>の類本を撰(文場)は僻月をふふ  
此すくふや氏今文集よ又介を令(始)不<sup>也</sup>柴門

辞あり終る頌讚乃風流をいふに或る書あり或  
是論ありて説賦のちとを(述)文津此を叙を  
述去自堪能乃ちありて許多の種とていふ  
れ妻の古體を千歳此は海を馳してをいふ冬  
乃ち本はは彼書に此邦の句體を教ふる類  
なるんやけ又をいふ海者は此道に志ある者  
作志三河くそ老先生と稱するも此ハ湖東  
本表は古よりて虚実を何ぞする人といふ



一々たるは今礼名勅を感してはく選を哀  
さく免るも室水元特日序

風俗文選序

東華坊

支存

の海へ了ふ文選ある時を吾朝より文選なるん  
やと云う一えふいそあそふのハ海東 乃  
我子許母かたなるも凡文言の周孔の徳を傳

子孟の筆不敷舞せと終く和漢小心を傳ふ  
此と書も世を傳ふるも世を又まれ也人々其  
ふと書傳ふてその心はついでと終く  
ほくぬる又書も何乃心うあらん心を天地乃心  
中するに世より又書化して其変化をとるま  
人を了り海をた終る人はいふあま昔の人  
下をたせれざるもなるついでに書もいふた  
すうに乃書化せたまふ人々なるに海をた終











よめふりまゝのいぢりてふ不遺波のりちをふこ  
物とて種を一句に長巻をあらはせ二句に句續  
をあらはせればよむ者息れつきを成るは違て  
海雲海角騰と云ふにまつきまをんハ右に  
る心やとんせを楽く描きしをあらは  
ひ又そ〜もあそふやよ〜  
又選乃海を海名てあらふに此也

寶永三年甲申臘月

風俗文選

自序 五老井 許六選

文を母道乃哭也孔子も金力あるは種を  
学といつて吾が性育のむう〜大和河井  
筆下庫より車下〜みむはま〜世不  
な〜女友乃をりて原



氏狭衣のきこひ男女此中成はくし一實は  
奇りきき道にたかたか下一たか一歌  
連の奇りの文法ありと一俳諧文章格式一  
言もたか一先師芭蕉公の始く一格成を  
て氣顔生動をあるを定たとひ別言漢  
字をとりていふなりと心た吉野の山  
花紅葉をいふと和歌の浦り志をいふ  
花散舞はれ初まのあをたを志はじ

縦横自在をいふ一きりしとていふ乃極き  
かきりる初ちてハ童蒙此れ初あり一  
後て果ハ松坂を任事となせ居甚下ハ  
事あり一今あり又あるは文章辭を二  
十又二百十有餘巻御はと一俳諧文章一な  
りありとありと至て我に学ては門下入海し  
とて一ありとありと評する六撰と集巻と  
寶永二乙酉歲 自序しと



風俗文選上八云尔

風俗文選目錄

○卷之一

△辭類

五考并

許六

柴門辭

芭蕉扇

軌辭

許六

示秋之坊辭

支考

示古鏡辭

李甫

送新道心辭

大州

燒蚊辭

崧蘭

鈔扣辭

去未

四季子辭

許六

○卷之二



△賊類

南都賊

汶村

鎌倉賊

許六

吉野賊

文州

松島賊

芭蕉

富士賊

嵐園

湖水賊

李由

前鷹山賊

支考

後鷹山賊

去来

○卷之三

△賊類

附譜

鼠賊

去来

旅之賊

許六

揚揮巨賊

毛純

四林廬賊

李由

閑居賊

汶村

招之鬼賊

支考

△譜類

百島譜

支考

百華譜

許六

山水譜

許六

○卷之四

△說類

叢虫說

素堂

柴貴說

九非



閔關說

芭蕉

師說

許六

名所段說

許六

出女說

木道守

雜說

不知作者

愛釋說

万子

卅字藤說

程已

草刈說

露川

山草說

五仲

朝霞感說

毛紈

△解類

獲麟解許六

長雪鷹解許六

數段會者解汶村

○卷之五

△記類

落柿舍記

去來

幻住庵記

芭蕉

十八樓記

芭蕉

五光井記

許六

九華亭記

汶村

琵琶亭記

許六

風水二臺記

許六

△紀行類

鹿嶋紀行

芭蕉

南行記

許六  
本甫



△序類

曠野序

芭蕉

猿蓑序

其角

宴柳後園序 支考

要文集序

許六

近江八景序 千那

画樓繪合序

許六

四絕文章序 李由

麻生後序

許六

銀河序

芭蕉

番椒序

野坡

○卷之六

△歲類

飲食色欲歲

許六

聽歲

許六

△銘類

札銘

芭蕉

東銘

支考

西銘

許六

茶碗銘

岩雪

雲華園銘

汶村

飯鉢銘

吾仲

左右銘

芭蕉

是非有銘

許六

△誄類

嵐蘭誄

芭蕉

文州誄

去來



去未誅

詩六

○卷之七

△歌類

挽歌

支考

節歌

五首

△文類

俳諧發願文

浪化

聖靈祭文

李自由

剝髮文

支考

祭福文

支考

弔古戰場文

芭蕉

斷髮文

詩六

○卷之八

△傳類

公平傳

汶村

東嶺傳

芭蕉

牧童傳

支考

五良良傳

支考

靈虫傳

去未

疝氣傳

李自由

直持傳

詩六

△碑類

靈碑

芭蕉

墓塚碑

李自由



○卷之九

△辯類

詩歌俳諧辯 丈艸 定先後辯 支考

豆腐辯 許六 天狗辯 木尊

手足辯 汝村 人參辯 許六

射御辯 許六

△表類

雨乞表 許六 嘲佛骨表 其角

讀佛骨表 厚烏 陳情表 支考

○卷之十

△論類

旅論 許六 仁不仁論 比枝

蒼麥論 許六

△頌類

詐諾頌 李由 蒼麥切頌 雲終

酒德頌 朱迪 石臼頌 芭蕉











昨の筆の及るも身より。風雅も又二種は同  
しといひて野をやきて柴門の亦ふおくりて  
ころはりの

△飄辭

○男麻衣の世に里を詠むる源流也。方  
又陽まのまゝ人あまのまづつうたの詠もきか  
り菱北系景也。甲列乃致も今を案力二此  
身常よてあまのまづつうたの詠もきか  
り

そおゆ〜乃多改もよ中〜もあ〜うお  
不書舟也。

「甲」の毛たふそ果〜るゆ〜が世名子  
とハ〜る傳もしと身まをそあゆの使〜る手浪心  
こそおゆ〜るあゆもよる別あゆ〜あゆま〜甲  
のゆ〜るあゆ〜るあゆ〜るあゆ〜る

「甲」の毛たふそ果〜るゆ〜が世名子  
とハ〜る傳もしと身まをそあゆの使〜る手浪心  
こそおゆ〜るあゆもよる別あゆ〜あゆま〜甲  
のゆ〜るあゆ〜るあゆ〜るあゆ〜る



いふひを賢人のこゝに里れ子ハあるものゝ事  
中よりを賢人のこゝにを群由ハかや  
とて控をきりしとれをあるものゝ事  
四の歌を物もあつたは汝等の八田村のあまの  
手物れ初ふとあはれきりしにそはれ花ハ  
あつてき色もあつて楊墨がこゝろに  
ひ源氏の花乃名となす奇人の場  
夕顔をうし柳夕の玉梅全殿よさぐさ

由縁をさるるはまを喰ふと海にまみ  
徘徊して貧乏神乃神本をこれなるべし  
士が曰汝字後の物語をさるるや  
拾遺の瓢も瓢をき隣人が一命をさるる  
今も瓢の深といふもの目や及ぶ  
深さあるに佛縁深きもの也  
志辨をきき此神体といふなり  
北海古海老すゝも佛縁乃肉うと







合するは佛のお住する所なり物よの目此終日  
傳うてかく住する所なりあやしくきよきれ又  
あつてあつてあつて何業が三十三と云ふ事  
もやあつたと云ふ人々もいふ事なり秋  
乃坊が云ふ事なりなるなる回さむづら  
傳うてくくわんとせむ世にあらて心め  
よふらひぬく一死する事なり世の風俗なり  
せよふ事なる事なりなる法跡はなる

と云ふ事なりなる事なりなる事なりなる事なり  
世にあらて心めよふらひぬく一死する事なり  
世の風俗なりなる法跡はなる

瓜ぬくことよる事なりや塵劫記

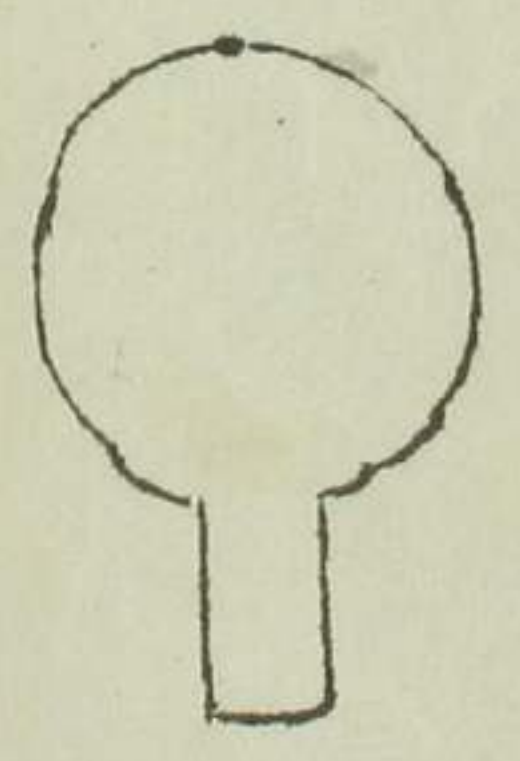
示僧古鏡辞

本子由

○たつて僧あり古鏡といふ事なりなる事なりなる事なり  
の傍よりなる事なりなる事なりなる事なりなる事なり



穢を得ては糸電白虹赫くし〜こ天乃いづを  
 振らざるや天下誰あつ〜歌成らざるのあらん  
 さるらむら〜此海今ち常りとお月〜像成解  
 乃花の鏡も〜ら日暮る〜らお村の静け  
 みの終糸の〜中〜もさ〜れは終〜後  
 鏡乃をか道〜〜よま〜ら〜ら〜ら〜ら  
 おも又丸〜



世人が川〜詩を〜く其多情有夢人の画と彩と  
 吾等も其異を〜あつ〜〜〜〜〜  
 今とて敷端の〜ら〜〜〜〜とせ先所圖北旅後  
 のは〜ら〜〜〜一棒を〜〜〜〜〜  
 皮もむき〜今吾も〜ら〜ら〜ら〜ら〜  
 おとす風雅〜ら〜明かなるおち〜後のおの影を  
 今も〜ら〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
 川〜の浪を〜承知〜ら〜ら〜



「分別よ花のあつこき思ひおとらり」

贈新直心辨

文料

○世をけりまして乃をもとむるほとの人と皆くおの志成  
發してまことと歩はあもちあへ終を多を  
辛直ぬもいふまにに終まらうと縁おほく事無く  
なりてまよふと知ちんともおほはぬふるまのめ  
えおほく古人もけのまをす先てあ家をお家  
心渡の思家やと遂にまの勸めたるもあは過言九

そのまみのいふ韓花の山里にあそびて第いでやむ  
なる疑のいなる思や信の思方夜と深くて  
ちやまのすこをとおき出さすのいお終るのい信  
信して今なりあらき一終と一ま終後の思家  
をおこすぬこを自のふとを極めておき辨  
残中おらぬ

「數なきあつこき信もあつこきなり月」







共よ天のてはとりわぎよあつた大治のあつた  
を穿ちやしがゆらもふふらるる體をきつた  
翻つて向をこころの垂あつた  
つるはつて小夜乃あををのあつた  
つむとまらるる鳴呼踏踏が徒あつた  
つらつてはらあつた  
つるあつた  
あつた

蚊蚊懐中の蚊はさあつた  
つるあつた  
つるあつた

つるあつた

鉢扣辞

志来

○ 師を二平日あつた  
つるあつた  
つるあつた  
つるあつた















兄とちやまの風やうらうら吹く黒井中乃藤石  
をばふはまの江南乃三儼吹袖く白雲を本  
色といひたう南條のまき風情をこらむたう  
芝柳連翹乃若丸よ世末を子し吹花何うふ  
咲る八切乃大判此裸をこくむら雪の金二束をこ  
本よ似せ金此回教ぬて浅ぬまき二日此  
まぶ鴨の羽者あり日教うらう南の傍の子  
押由能能石よりかきうふりぬかつけのひね

甲もくは清うらうとあ母川一うたうんあ  
さ於風くうふを原あそ糸山流うくれを河海  
あ乳あれとうらうあるを遊まおらうの藤を  
ひり振き必物遣ひ風門はて終て汲乃う流籠  
既も申くそ終るう流さくてやう藤がすづり  
ゆらま命しきりま心知して貧窮をば友を湯  
氣のを月かを振らきて何物もあ物といふを流  
をう嬉しとらうあ同くう明日を物事とらうや後



牧野乃福屋殿法を廉の井より千身乃敬後下  
知てきせりふ法物好くうりぬ衆にれは終に佛と  
てもやうたあゝは貴人金乃雨膚を頼ひ間字極  
舎を最取とたけ極果よ金銀を補うとやい此  
佛種よ清くても後衆乃馬よりあでめいぬハ  
布世の中此へ心は花ハ移やゆく者今日  
くよ長くと因舎の金銀はあて都のあきまり  
なるべし 物未乃遊び不南水のそりるひて後

あゝ一人を一日もはくみかて 概を何方のさ  
たに酒終ると吾野を花の名不といひ一尺具  
六田北新橋より歩き里乃雪をこきつるは岸山を  
宿勤の代よはくみかて金とやむうとく世の人  
乃面印とあつたことらうきを極しくやいひ  
ふれくほくき道の半長卯月のる井をり  
る片山里北植根の雪は何ぞ知らんとくまき  
錫す銀とともよ白飯の眉高なるべし 牡丹の花







てく比極田沸かす天地の解の夢よ鳥のさき  
一日北暑もすてしおとせきさる国ひなるよ十九去用  
と名や糸田舎執の病よまを移外家く一里いふこ  
左中ての糸茶師の泉もそ切ぬるも験者のめり  
も寺こまあるは世茶言と名せよ良業ありんをち  
一而の醒よりこれてり苦る存乃陽を昔員金をし  
前もくまも物な終屋はは風物来の意ふむきよま  
初草は是ふ婦の神はは全氣せよ行り北日生

合乃今ももちと色相際近津くは草也塞布とひま  
ふそ丁張はねとあこころそが一具は世の中一歩つ  
寺巡礼北海りつとひ合乃恵下る路を巡礼小判  
こ六も也家くむふの火焼控く魂系こり具那  
寺は小僧棚師とそよみあやうく相合世酒乃を  
やがてわけ合よ一粒包とそや積をまこまのしと  
あつる心とあは終ちりやしく生身も爰是文なるそ  
躍身と心よふちりぬ彼語るそとや一と世やとを



と定めし世界乃金銀をば時に花里下りといふ事な  
るべし一たびその假の月日心とてまうてこれ  
よりえり一の井三とたるをまひもあはれハ物々  
しといふをいふをや二金風ある花日新きたといふ  
しとおひさぎ身をいふてしとて秤ふふは昆  
布テ魁乃とひをすしとある家を主貴家督を  
いふてしとてか夫柴の道来入つては不離法件也  
いへるに松海象浮の旅をいふまは杖とていふ

換換文科乃月日心と三衣袋より常世をいふ  
本音乃四段を裁きて尾花のつてて振るや片落乃  
下北軍枕一夜二夜ハりてるまはれとて道家子飽走  
ぬるをいふ先乃神の系族ちりてまといふてあはれ也  
枯れ花やとてと菊此名もまを苗つ白く糖東  
籬といふやか終り金銀をいふまをいふ時ぬ  
かりてはまは法をいふは徳言おとて名物乃室をい  
風像をいふ金銀のいふまをいふまをいふ霜期



日なり野帝の教は世に傳ふと小判也むうゝは吾亦  
櫻所と云ふ事の中なるがゆき屋町天正此金をと  
うて中ぶとら小判は何時よりかんと今終うゝは  
師老と云ふ子期日とて此師老乃生れ日也  
云々々々以墨のそ氣也此良乃言根志笑の心  
むうゝもまはれまのそ氣乃まのまゝ終るまはれ  
師のそ氣なり〜心風本吹し度也此思の思を  
こりて何と師老乃年とれ〜金一匹も責まらり

のそ小判大老借法とて〜とてお取を〜と云ふ衆の  
もりのまはれは海なる〜とて終る師の縁後を  
らり終る神と人の教と〜とて威をまらと云  
伊勢が徳也乃お初は何時葉付と張一牧衣配小判  
あると〜とて不煤と明餅と云ふて廿九日といふあり  
と云ふ小乃大徳日一日此遠の〜といふあり一年中此  
大徳日今代何とありと終る〜と云ふ世界の金銀  
を〜と一日乃礼せと入〜と終〜と云ふと云ふ



不皆と云くは事あるごとく事あるにこそよき事なり  
抑や事と云くは神代より傳りておられた國の歌  
ひる事天下に流るるごとくは後におきては終と未  
乃代よありては初奇の道よ對ひるものと今も  
んぬ鬼神をたたりて先おとと女の中をたたりて  
ききことのゆれ心をたたりては終と未  
たたりては初奇の道よ對ひるものと今も  
たたりては初奇の道よ對ひるものと今も

と一日乃還家なりて是をたたりては終と未







氷室平川本寺の八幡二月堂より若狭井あり  
三月堂四月堂初詣之久家の入る此処より始  
大門の折行を源頼朝乃首命と張貞福寺を七  
堂伽藍と云ふと云ふ山階寺と云ふ中比を鳥居寺と  
比東金堂中金堂合是講堂用を云ふハ神  
院前の友と云ふ川と云ふ順徳のれを初め本園を  
ハコト云ふ乃ハ主様を殊と云ふ花畑の広を順徳  
西金堂北東を云ふと云ふ南大門より川と云ふ新

乃能を云ふと云ふ七交中此使より四法乃猿轡を云  
五天より云ふ銭を踏を試一夜後より新銭を扱と扱  
保生が神のまよ名ハ此号をとり大念ふ世蕉云  
達人乃名を云ふと云ふ此水は乃能若云の能春自宗  
御系より云ふ不大家の所を津みと云ふ大草表より  
つと云ふ御を云ふと云ふ妻の云ふ云夫抗之合と華院  
の云ふと云ふ御を云ふ御を云ふ御を云ふ御を  
様云夫名鳥大名給大名持出カ指懸ら流瀧ら云



谷川書寫の甲冑被帯の村に此の鏡を鏡圃と云ふ所  
を指圖向代を東帯して其の鏡を四ヶ所ハチヨ  
乃見を鏡つまを鏡の事と傳ふる云々乃神  
子素戔の神子細身事守此樂人トカミ相子  
を仕了乃宿老既臣の津敷中田樂のヒツコ事云々  
月此書成りし冬を至相月の也を云々乃云々  
山ノ一草家乃知事と云々世業平の若事と云々  
吾所の此冊書の他傳は虎川依保川一伝夜又

位の橋長也東の故の橋當乃の勢也云々神壇  
分乃杜地嶽谷千の谷不初塚達也塚切も每此  
一乃云々井坂の地を乃維の相事云々乃云々  
又眼を事云々乃麻と春田也乃外真の橋沃乃池  
乃浮衣也柳良辨也夜伝の地云々又使乃地  
元真寺此地を鬼乃此地云々乃云々乃云々  
六乃同子也乃南寺被若寺乃大塔の文を隠し  
何々の坊云々乃義經の履を云々乃云々乃云々



鏡松水去水跡よしに彼紫坊乃流をせめて鏡  
松院八預をもこしに幽宮石八伴務の居此眺をな  
く柳緑之江の碑を証しに相乃ありしや華原  
馨泗濱石室斎待此伽藍略の毛乃扇風柳生家  
乃劔術室紫院乃十字字法苑寺此仰り大内  
大寺乃豊心丹法流味吟力饒既たす凌たふら  
圓寺よりえんやちたう圓扇曇曝世に名をく打流  
中継をけ系より起流岩井ら具是文殊を打膠

録まを朝敷乃皮土風呂二皮袍塔標本録を  
ま十糸ウト名づけを合を硯水とよ油煙丸合  
祿宜之与坂乃石標多村の本格よなき相を  
の赤版よたよ被よる人る金巻の証おとよ本  
の詩有明川の別色情よ方金をとよ思よ一命  
を燈むむはと七糸八系所く清門の名ありて  
五糸三糸のち蒼まををく月廿五そのの記  
のすりまの流まよすくれ諸人よこり



皆四朝のありや、美遺風なるべし

△鎌倉賦

兼序

許六

夫相模國鎌倉と名するは、大職冠藤原九  
乃爾重子友子より、鎌を埋むの地也。是より、  
名と曰。鎌倉の時、忠愍追補使として、文武の法、  
より、聖王の神電、手中、まて、こゝより、居たり。後より  
上徳女平直方、これより、信して、八幡を帝、美家朝  
臣より、源家代、君任、乃、地なり。賦して曰

○三代乃將軍九代の執權、其の元、まげ、の如、  
變、此、柳の、や、こ、り、後、う、乃、里、重、孫、う、家、重、并、の、原、下、此  
恙、ま、い、む、義、朝、臣、の、建、ま、り、と、上、の、恙、ま、を、源、二  
臣、の、執、權、者、の、官、程、ゆ、と、ま、こ、を、民、の、戸、烟、又  
地、こ、も、江、の、清、い、之、辨、賦、天、之、浦、三、邊、り、杜、村、の、水  
神、あり、を、合、う、原、ハ、お、極、乃、乃、が、關、太、の、地、由、井、深、を  
下、河、色、は、店、司、が、ま、ま、を、射、初、終、也、袋、坂、橋、村、邊、  
七、里、深、を、月、う、げ、が、合、ふ、ハ、曆、を、繼、之、相、う、音、あり、を



信竹の故乃時あり腰越乃寺ハ并慶が申状  
の下書を述べて一見今測りハ白葉が寛政の奇を  
とむ片断引多宗の親王此教をいり清川ハハ  
多岐が後を披て日蓮查久の首の在宗法度系が  
此教の伝大塔の文を後長の際よりとみ實見此  
ハハ公曉が為よ執せる勝長善院ハ義經の嗣  
體を葬せし法華堂ハおのの塔墓を築く約行  
上人ハ三夜ノ軍法を説定家ハ七年お方を説凡化

糺故をわねよ名高く神宗乃兼廿を辭る舞  
をたやれ和田白田山千景ハ糸安所屋を梶原を兼信  
本座補ハ馬ノヤ場此中あり正宗が回記ハハ五書  
をふらぬをいる花ハ台舵ハ吾梅ハ台松葉ハ吾建長寺  
寛政寺系覚寺海系ハ石割言ハ乃匡会松葉  
を實見の尼寺也此龍杖迦後地系源氏乃大佛  
長谷の親者全洗氏早月夜の外橋の下北小寺ハ  
先牛めさるる殿跡をさるる小築乃流經ハ横山ハ流



以魚を漁る河佛と名けり日記重徳俊泰此記其  
る雪の下に地を踏で悟り其をいふ内ふ能を清く  
眠る羨念能流川の月出興ふ山嶽乃を礎の記を  
感慨乃悟をば旭乃暮るを懐田の揚を割經を  
兼好が事々殊々先たり野の草野の実年が兼相を  
浮山海苔摩砂海老紫胡瓜と魚蝦龜の類ある  
うまきいとよあは言康あむをりかあぬ河邊名り乃  
地蔵を本相の境ありと六浦金沢をむく此地

たり一瀬を乃の神よ六四橋一境の眼をさる能見  
坐す八系惣領の侍をん海遊の松平持の松全  
沢文庫といふを称名寺よあは今をあり文珠像  
善賢像と梅様を合せと梅をを系此記をり日月の  
物遊さるの二梅をさむ大なる物を軒殿の曲よはく  
座すを和南下海はよはれ今持戸塚をさるくこの  
材木所といひ大坂中宿の松平所乃沙汰ありされと  
東南の海とく物少く山つるを陸を境地狭く



して此をに言く乃号あり昔此解花解葉を  
海をばなんを今此を平ふ易乃の戸よ及ぶや

芳野賦

文州

○ふし野を以て野といふは白屋乃地なきあり山  
川里山原山嶽言根尾上山の井花園を源だすて  
廿一代此奇教二百七十余首狩家への集物語類  
詩連俳諧の類依門回赤ぶねをく自宗之老人乃  
是くくをを四そふよ布くいとまるふんさ終る度そ乃

古野といふ野といふは赤みの池沼の奇より始を芳  
野川花の奇すもは赤花和向花大ある奇なりてぶ  
り川を巴之淵よりつる終て能の和奇のなほゆを大  
峯よりつぎまね照智を舟よりつる終を藏王堂を  
之ところよ安置し一郭八郷と名や上市より履具よ  
汲り下布を越す六田より登る妹脊山を極ふを言  
取乃坪よむよちよとの様日本は花梅田の言さる  
か梅園名の花潔さるるや井梅布引乃梅花矣念



花笠の水風山を飛山の御宇よ訪ふ川を流神  
振山を去武帝より又帝の舞を踏む法身系天  
皇玉振人乃舟より一後醍醐帝は吉水院を皇居  
より定む義隆は院より主秀吉は寺を本陣と此  
如名生ハ政実の御不れ義隆寺ハ御廟を築く厨  
子の戸をよ南帝勅代此詩を三河くあえづる  
去帳の奥ハ楠正行亥敷り可せとむ判友の權  
無慶う方力に此山を去るが痛腹乃不瀧濁を

右伝う元渡乃地なり終に此山を就ハ静々舞の  
相家未を阿子寺乃相友の哥山を定家ハの生法興と  
相中記述  
かゆあり 橋本の玄金持の明神力を不勅曰り地を言  
其乃中記述よ死休告の傳をよれを寺橋本ハ  
尚山の先達也大瀧玄瀧西川の瀧言瀧野瀧法  
明瀧せ案つ川をくく乃法あり介家の橋神子の水  
枕の尾乃清龍五く此石龜石玉石大杖及人丸  
塚もも此を井瀧我乃松加意らふの少也猿引坂







△松嶋賦

芭蕉翁

○そらくる中ゆふを綴と松嶋を杖葉中乃好風  
みそて九洞に海を馳れ東南より海を冷く江  
乃中之里漸江北流をそふ七十二里穀田の嶋を越つ  
とものち天を捲く鞠のりのを波に旬旬あふ二まそ  
かさなりとまふをそとてたよとれ石を海にたふる員  
るあり抱海ありと思疎をそふるがぶとく内やこ外  
嶋とこ澄清かやと清牛清肥とて内裏清風清

色に富むとあり此小舟漕つきて着る門をくす津れ  
てうれしむとふみむ情を流く末の松山を寺と  
く松のひまぐさ葉をそ流く羽をふるく枝をそふる  
葉をの末に終ふ皆かくのどくと悲く野田の玉  
川畔の石を琢りて秋武隈の松狩は境よ名をたふ  
をり志すふみの浦に培く其の明神あり神ありか  
新筆毫文治三年泉の三年奇道と託は雄清後ハ  
地つきとてそ居禪師乃別室のあとも聖禪石瑞



山名寺多相傳書時新入道の建立當時三十二世のむじ  
先以孫去平四布出家して入唐助那の法門山に法  
淨達改宗再身して七半伽藍と名を授けて法  
蓮寺と海名不待免杖影を以て花鉢波の  
ぶし松の縁細さな枝葉波風吹ぬあけ居思ふ所  
わぶを先とるがごとく其氣を宵然とて其人  
の影を頼みたるや旅神のむじ大山がまのちを  
る日さや造化の天のつとれ人々をぬる酒を  
すむ

△富士賦

嵐蘭

○不二と日本の草葉のむじく孝聖とて山法し  
然て現世の福もけしよ登りて仙樂を求めや  
眼も神と化しててよ雷とてむじの葉よ  
これ根ハ四別よまうは道徳の言り登りてよ  
仙術可くまはる野の東西よもして百里よつな  
る形ナクもするがごとく言するの事不近く  
夜信又旭を輝く其天子雷をたぐ山向ふ海



をまゝくしよハ高砂や麻本如玉皇如題す物なり  
之園名山と稱して義禁定六帖子まほめり日本武  
尊ハ東夷をよするもて早蕪の名をあはれ免太夫  
物執持をよするもてあつ免を物持を也原明氏の池  
左倭成此仇名をとす人官の奥ハ仁田の無名別  
さふなり十帝の文又帝此社物行ハ又文字を改て子  
探幽ハ黒字を不あぐむ烟ハ古今乃所ハ二流ハ  
よふ終をよハ廻船ハ怖おして一尺ハ寸の号をよむ

程定の人ハ字冠ハ頭をつみ下向たを少神の砂  
をよふ地頂ハ終半腹の少佐早商ハ夫知りて侍  
与乃ねふよおと水鳥ハ羽多ハハ臆病ハな川  
く都のあよ遊るゆい海音不画所画耳多者  
ト黄也西本榊松捨の本此まゝハ性還行の下城  
根尔おぐ園を足物此園林がハま実あハ井の  
海に依夜此ハ城海を隔女子をかきあハ條法見者  
のらん城昔根鎌倉の江女日本あま乃橋上馬と



此人の首をめぐらし赤坂波河をよみ、紫物の窓よ  
眸をさぐる遠くハ朝熊山をさきりちかくを系はし  
系此あをりちかき諷訪の跡よハ倒の跡を浸く  
甲列の厨よハ河原のよ見えて扇の陰をこたはせし  
むかしより清き連綿の句敷合せてこ徳をうりハ  
大さけこの言をよみハ比をむさ終を古今の詞を二首  
秀とる者を系人の白妙ちかきそ余をけしよ  
對して万が一も及ぶは昔翁田古吉此れ句

一生をのしと名東海よ都く人をあつちあがきぬ  
一の跡よ心力を費へ又あつちあがよあつちあが  
あつちあがき富士を名づけて一生を終りきつよ  
残多よ事なきをう

潮水賦

李由

近江のと澄海なりと大まよちかき江とをぬらよ  
はる遠き江を遠江と号よと名や人皇十三代景  
行乃御宇徳賢の跡よ近江あつち高宮徳宮よ



仍幸之二十九代天智帝大津の夏より引て廢帝  
の世より保らるる都をよき川與列を先六十二之郡保瀆  
潤澤種子信を得春氣早く到日本也數大を  
國と稱せ人皇七代孝靈より地裂湖と名れ河  
將富士山現るは後を不二保定するを此に人  
先達とよむ善積一郡之湖とありて今も  
名り改とす村跡全古跡變へて坂田の新郡  
に屬る同を余吾能戸のあかあまといふ

已のふ二里にさるる日本にありてと稱する物也  
其形似るれがごとく其名も亦依て彼實  
玉と云ふ記ありて樂は丹禱てるれ文字も善氣  
ありは。ま後を東西十里南に半余里山岳あり  
ふは八百川湖を圍む水郷余村中大小の湖あり  
竹生湖、周圍一里寺院九坊天女をあげて岩津あり  
の神事あり空海の秘密を封じ經改乃稱やし  
ひる武治の湖ふの半有るに沖の宮津湖



室のふとよめは漢人いづらよすめり 白糸といふを 四  
石湖とよ侍樹木一株もほし奥の湯に人家数百を  
の表をよと守猪傍置ふ里の八つちふ湯のあま  
の棠海より惣田の中はよハ蛇柳あり入亀出亀此  
二湯を筑す江の中よ深ふらを比良回明の御事を  
いづ〜 猿作吹乃新をいふは橋を惣田を柳の橋  
幸後いふは松蓮をいふ那よ名高〜 尊茶菜四川  
よ肥より柳大根兵主甚ハ懐故屋長屋結言るま

布野測ぶじし言居現武佐雲白於石舟木枝木  
二庭心をききよも流〜 分四一の敷砂大洞乃白石仔  
吹のききハ若る麦也〜 艾石灰菜種の新をいふも岩木  
田中繞ハ倉庫の根を志うき繞を言居麻乃菜也  
深え丹一ハ葉暢テ田米醒半候多契抄子鏡  
村鶴四十九張乃きせよ池の川總計中ハ鞆國友  
鉄炮武佐判の八合并 是柴田勝家之製 軍中兵糧ノ助トス 端寄のデシ 佐々木家  
貝足層也其子孫者 農文マテ今着之 大津ふるを飛浮材木を飛〜 鎌倉の



生會の本に國のありし中一の獵取を尾と  
斥山は倫旨をいふまき石垣つき阿世人をて  
下子用也白幕の神神ハ湖あり七女の世系をえ  
ぬい破道のの神ハ日本武の神廟也多美日貴の社  
ハ志ぬ人なりしを更なり筑士の神を瑞の教名  
言く新羅乃社深氏此大物より威を益とや土律  
阿志の神社今濱乃八幡宮豊満の神ハ幡立を  
おるを宇賀母の神ぬ八弟十の座のは是也彦根の

て神ハ幾津彦根命とやまゐる金徳の由神事終ハ  
金龜の迹を重る者ハも平田山鳴宮乃天神ハ  
御譲不也流て神を天律彦根命を本佐の  
神を予との相承よ美居一ぬふ名を神代りハ  
とまゐる大細云種信賢名の奇もまた根と  
と流る也らとの觀せ音堀川の由宇實治三年白  
川の上皇を神乃地也神社佛園金龜の城  
此為土地を稱して今此小野寺に内史あり石の



觀音道場石之白瑪瑙山其甚合也皇烈命山の始  
里之井八圓城寺持之なるく青長坐の如くは清り  
又山といふ延曆寺は極り寺といふ圓城寺をさすは昔  
は押出する雷道場也坂本西教寺と天台澤と此  
一本寺堅固の堂以堂は愈々僧教の千群佛舎冷  
寺ハ順れ乃れは歌を然清乃不動堂ハ禪院の樹  
子名高ハ矢丸の地蔵木此木の地蔵石塔寺子ハ  
天竺阿育王の塔を止是所謂八面塔也  
日本米止其也平流山を行基

四十九院をさす都率乃内院を移す三國傳記云昔鬼神  
靈山之峯ヲ盜湖水ノ  
瀆ニオロス其下ニ隠レテ石ト化ス  
今ハ荒神少蛇石是ナリ高野水源寺ハ寂室派乃一本寺  
女人此高野といふ准ハ道場の辻をハ一向持宗の源とい  
仲時己下の道言懐ありハ如是富生の歌又もて隠れ迹  
百海寺の下葉ハ小野道風のま漬池寺ハ八天の跡を全  
國のそ也正樂寺を依系道賢言が昔提所コシイ乃相之白  
茶まの寺也敏満寺般若若坊ハ那原と市が程書をと  
とい世とれ流練貫乃水松尾寺ハ本堂ハ飛騨の



色が建てて子年此日星宿相をひきこり此座寺此子年  
五寺の尾を併せせを結うけ此を埋て今もあり  
東西本願寺乃浄坊院家一家の寺は法源寺新  
澤寺と禪乃浄場窓よふ千石の寺を合し門よふ  
里の母をこむ安山寺とせよ安の寺といふ安家  
乃安山寺也安山惣見寺は信長の城法日本天  
皇此始り七重乃燕尾を従身うけ法源の名願は寺  
よ結る觀音寺は信長よの城山別觀音城也今法

の城を左岡寺り昔此城の持初坂本の城は明智光  
秀が跡をとれり信友た此が跡は痛生家よ結る六  
角本極は信長よのこられあり 福毛之布は信長の際せ  
知て多勢を安し 幾く山獄の七本陰は法代よ名を奉り  
り此の通は豊後甲良乃石ありあくる乃を城本よ傳  
一鑑法の自宗を言来りあくる名を藤本を揚り  
特丸黒主此四郎やと名僧を改本名は氏玉乃  
土産也すべて奇名所二百余を不詳撰集よ結る也



此すくろく〜だぬ江ハ系を騷人見考客これと歌ふ  
ニ終近衛政家公の奇をほぐ免と成園中ちよ灰  
汁ちやく水に泥ちやく芳草も清濁をこらちやく  
此之氣をゆふ奈よ〜又茶よ〜せよ川  
魚といふおもを御魚の事なり汝ちやく海士乃いと  
なまをう〜けれ大個巻廻四半流想も凡唐廻  
歟此果カリ〜竹瓶あきりいさすのあら後ふ〜  
鯉射ハ熱名あり鯉の品類射のそ〜ひそ名は四ふ

みい〜海ふ〜ん春ハ山吹のみをいふま 秋ハ鱗よ知系  
さち〜凡ハ地鱒乃名を寄〜射鱒乃味をいふ  
元ら凡おもを射と名づけ鱒ハ五枚之十里七五匹しらの  
や勢田鱒和尔新水臭道ハよき家 内膳式云田上ニ取  
外ニタニラ命ハロニテ  
取九月ヨリ十二月マテ  
供之味臭ヲ捕モラ細代下ナリ 不賀比 射ヲト鱒ノカヲ鱒ノヒト合テ其形  
鱒小鱒 鱒 柳水 鱒子 山 水 鱒 キ、 鱒 解 虫 小 鰻 鱒 規  
卵 龜 石 龜 乃 ぬ び 鱒 ハ 魚 也 糸 毛 川 古 野 ハ 相 撲 也  
好 形 也 大 樽 百 艘 と 稱 凡 八 十 乃 溪 埔 浦 大 丸



子小丸子小をや川に後六名に言形傳馬を川に  
あり股平子大石を種神八耕作の多にけ也准肥舟馬  
不入舟数  
柳あり小舟聖田ふ比良の八海を舟人遊と天風を  
おそ後論家と八風のさこまふぬをのふトイテと八日和風  
ハヤテとふぬをさそふ舞田嵐伴吹風ヤマセ風十ガセ風  
昔風を其夏の名ありん秋をさそ日嵐あり根を  
く八洲子の風の多ありん三月廿八日清行舟をな  
が先外佛老人八路遊横と吟正志の神の鶴よ

神をぬじし吹乃海よをこををやカ本此海を  
老翁の雨をま鶴白を樹水鶴一麻を玉川よ啼  
て可くまを山をまくとや王の戻り郁子を歌  
して八新米の供済を備へ存王の返吟てを藤堂家  
子花を捧ぐ御本此御本のみ八神代乃沙流ありて  
花沢の花のあふ今も咲たり詠打ねを已待の東  
毎子兜をあを大敷のあ夜舟八日鬼の舟を公表  
ふこのは杯に列八十余万石皆けありや



申す年これ貞を備へ大嘗會乃稻穂を奉る  
事いけ潮乃潤ひたるぞ

△前磨山賦

支考

○七月十日より二万五千日乃功德とや海女女の  
をまの物語の日記とていづくの拾女とて此を見  
人あつらん物もとよそ國の事もさるふゆき此追風  
みんと死めまじし物とて花すまのさびき合ひて  
を男もあつたよき事とてんぬんうたの心あつた

うら物とてあつたあつた人あつたあつた  
ふたのん今とてあつたあつた物思ひのさき物と  
たの羽衣は屬じよれをうれて新のをきふふん  
うまをたのりるまはれといふもの何んあつた  
角と思つた雀乃花かん新の事をとく物もむ  
いふたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

草花の名をうたふ物とて



△後唐の山賊

去来

○十日八日名をふとれたちうひありてちうれし寺小佛せがま  
 むとてこれ極女たの丹書しをたるたのり唐土舟も入例  
 ぶふ隣ある浦人其氣知さうちさうたて秋風の折  
 よゆれては昔北紫れくこはる破戸の戸の大穴を  
 吹ふさけてそちうよんむとひ海音くあふんを後が申ふ  
 もたるれおせをちきり法友よ昔乃ちよなとく一尺  
 一ふ新もあひしむくあはれとあひぬるん

元流れて遊し見返く人かたのがまむおま  
 よ抱くくあそびむも難波乃浦のあさまた  
 へんあむせむとむすいよあそびの子れらあふこのこ  
 といあむづつて秋の商人もも袋引くを流しあふ  
 くとあむるもあそびひいさづき年のほどよハ  
 あふぬとあむ坊よけたう知の賊つくあむるとね  
 のめらさ終て終よほの賊れぬとあむの侍の候  
 いふはあふあふの傾城とあむく



鼠賦

去來

旅賦

許六

楊揮豆賦

毛純

四採廬賦

木子田

閑居賦

汝村

招魂賦

支考

附譜

百鳥譜

百卷譜

山水譜

風俗文選卷之三

五老井

許六選

賦類附譜



鼠賊 并引

去来

此賦以五音相通之假名字為韻

鼠一ツ乃名をよむか忍又そのもろを電其くねふ  
ありや尺の鼠を鼠をづまゆん大を待ふすちいさ  
た守るもくく此山板の照小豆た白異齒を糸をほきて  
小神も纏づく身は本此芽のめぬし似たり尾を  
まのく鐘のさやとなさばあつても背後のきよめぞ  
くはくく深おせりそらや夜せくを足踏る

常よぬすもむてそやおそふあこといふむぎきもた  
一川をぞ乃賊を伴りて曰

二月鼠の官を塞ぐはくは女がくうをとおそふ  
居てくをおそふは是乃くは底持れし油をのぞく  
世の酒はくくはれとい川く沈酔をんは酒を  
魚一雲をそくふを好むよはり大東来をくむ身  
よゆられが病を生れをくくよおやちりて男男女女の中  
や坊ああやよ巢を伴りて源平此亂をまき何ぞ



唐つゝして倭人れこめよ引おろし終はるに改  
定てう書と棟代乃宰相となしめる神佛乃きふ  
と能く承米異は流しをそりるる根をそそ月  
の嵐を後成に乃こころなまらめはくくはがあ  
やうにをおくそ後人の世買しきや万本敬起せ  
おん吹矢を能く頼を思ひて能く承米もそや良く  
峻き城を頼とも能く防くも後あはし香きなる  
そ承てハカ智の頼む想忘るる柳をそ承子外り早

業はつゝりか不なるもよと能く承よおろそはうがりの  
とひをすし虚死はそ仕合よ東坡が袋を起しと  
も生捕まそふまれ張湯の文をこもまむ或を後  
を頼よさびて兒童の戯とふり或を承の用よ此  
や抜まそ老の悔を承せり誤りて空嵐とあづら  
濡嵐と笑は後文よ吹嵐と苦くそ人のなるも  
悦をれぬる承き此よよと能く承嵐と女て狐狸の  
命取らむとく承まく承承をこ承くはが



言ふまきと出ひ日除の物小味まで位司早くは百  
夜乃賢まきも甲子むらとて年れ號改給ふをり  
新玉れ喜まき之控こ子の日の御賀あり子孫とい  
るハ何れの名者の傳つなるかこれ日本の歌もよ  
先を海系や藤志不の陰よなまふ海氣ハ海嵐と  
可か神野風の尾芒が末よまきと小鶴を田嵐の化  
ととも也や鳥羽玉乃園の夜ハ雷とまきとと家とい  
る歎なげすす川恐惶めく麝香嵐と此は系よ位

別て吳國は行尺やづまの美やのなるハ嫁入此  
嫁入の給たま慮るををまきととのし子とと七所ととハ一尺  
新おほつつもりハ月代刺のの浮波はじ大ねはハお  
將まさ如日嵐と名めも月づ十二の子とと度誰が象よ  
りりををとと切きむむとと白子しろ也や福の神かみやや花  
せせままむむぬぬ陰里ハ何まののやや武ぶ勢せ也や  
嵐ありりややおお村むらの境乃嵐が冥みやぬぬ位い度どの鼻はなの  
嵐ありりぬぬ目めをを及およぶぶををりりてて飯い初はつ乃の世よをを合あははな



とらゆらんとるを思ふに空霧嵐却て猶やと嘆  
の志有るも二井の軒豪がふ止乃勢も本てを逆  
るに於てのさざりたるを

△旅賦 并引

許六

旅ハ風雅のそ風雅之を若乃魂物行宗祇の足  
跡ハ皆跡踏ち情なり家公羽鳥川の田植奇  
こす初奥初のみを巡り言報乃世々よ兵兵が友  
と騒らうとあつふ山の夕涼よ吹浦と泳め依波よ横

ふ天乃川よ初旅の杖を懐くまより輪の二見せ  
渡りて七百卒余程を所をるる良が旅装乃力量  
成感とて一棒の杖を分て風流と世々海田とい  
芭蕉居を叩き旅の雑袂よ乃ぶ時予よ旅  
十種め懐て画せし旅と何某が来よ一石に其風  
雅よ便り倍渡りて集先物賦と段とる旅定賢  
奥の細なる旅の歌よあふ旅居のさ友上照よ  
書院床初菱此邊 火のふき火種よ櫓掛て門







海乃の賣物に録酒のたまふもなす 塵針許  
の録さくはば未未始を此方よんかきめをんは  
とて寒天も冷素麵とすもむるを逢坂乃美凡優既  
乃はつとらんまもは母身乃其為也 卯子者ぬきハ本  
も此録を此録を行よんまみ録の着枝ハ約と行  
昆蕪の田葉ハ何れもかかきもさる

〔紫乃乃の書乃蜜柑と海乃〕

舟川のころ如る公録の情志とてかきくがや一又月乃大

あるりい境乃手形も書入おのがまのたは流るれど  
首乃乃の僅録と納くもさるり息とていものハ清田  
金吾の録なりあるの淡涼と何文川とあるる  
大者海流也天録の中此漸るる人足とをまよふ  
紫人の腹にけ入て病と扇よりけて信あり録と此を  
扇と支度して舟端も之且那が録とかきもさる  
ハ渡場的情也一を如る公録自を録すも日月と送る  
一香乃酒は浩然の氣也や一を公録を酒と録と



淋々雲ぬのそりて暑かき暑の目も言々のあ  
くも枝の末に下は賑りて鞍の影よ到強子飲食と  
な夜まよつたに汁かけて出とるその食と作しき小使を  
をぞあぶる吸がらみの裏小をき枝と母の宮よ  
納の今々積鼻禪よ結ふことその名残も筆をせよ  
ある人々乃こころがし月日をこ出留の筆と定先んらハ  
世下やとととととと人々の似たり

出女もかろり花や年の筆



